

## R7年産大豆子実の主要病害虫による被害状況

茨城県病害虫防除所の調査によると、令和7年産大豆子実の病害では、紫斑病、ウイルス病の被害粒率は平年よりやや高い～高く、べと病の被害粒率は平年よりやや低くなりました。虫害では、吸実性カメムシ類、フタスジヒメハムシによる被害粒率は平年より高くなりました ([yr0712.pdf](#))。

発生が多かった圃場では、下記を参考にして次年度の病害虫対策を実施しましょう。

### 防除対策

防除薬剤については7月28日付営農 News 第3262号 (<https://www.zennoh.or.jp/ib/contents/make/einou/3262.pdf>)

を参照してください。

#### 紫斑病



写真1 子実での発病  
(紫斑粒)

- ・茎葉を含む被害残渣は持ち出す等適切に処分する。
- ・防除適期は開花期の20日後頃である。
- ・開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の30日後に追加防除を行う。
- ・2回目の防除を行う際は、1回目の薬剤とFRACコードの異なる薬剤を散布する。
- ・収穫が遅れると発生が多くなるので、適期に収穫する。

#### ウイルス病

- ・生育初期にウイルス病に感染すると被害が大きくなることから、媒介虫であるアブラムシ類を早期に防除する。
- ・発病株は早い時期に抜き取り、処分する。

#### べと病

- ・茎葉を含む被害残渣は持ち出す等適切に処分する。
- ・密植を避け、風通しを良くする。
- ・防除適期は開花期～子実肥大期である。



写真2 子実は菌糸で覆われる

種子更新  
を行う

被害が多発したほ場は連作を避ける

#### マメシンクイガ



写真6 莢内の幼虫と糞

- ・成虫は移動性が低く発生圃場で繁殖・越冬する。
- ・防除適期は産卵最盛期～その約10日後である。(大豆の生育ステージとしては、莢伸長終期～子実肥大初期頃にあたる。)

#### 吸実性カメムシ類

- ・薬剤防除は莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。
- ・幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。



写真3 ホソヘリカメムシ幼虫



写真4 アオクサカメムシ幼虫



写真5 イチモンジカメムシ被害

#### フタスジヒメハムシ

- ・収穫後に枯葉の持ち出しと耕起を行い、翌年の発生を抑える。
- ・薬剤防除は子実肥大期にカメムシ類と同時防除を行う。

写真 1,2,6 茨城県病害虫防除所